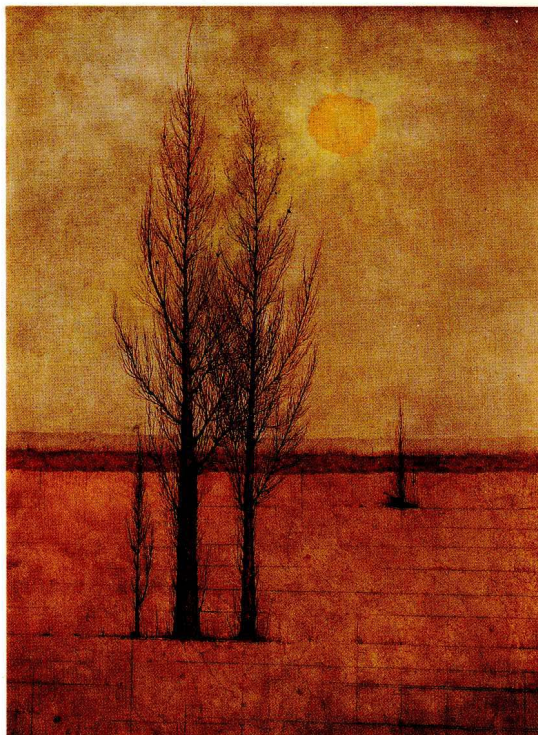


福本邦雄



眼を開いてみる夢

—写実と抒情のはざままで

フジ出版社

眼を開いてみる夢

—写実と抒情のはざままで

福本邦雄

眼を開いてみる夢

写真と抒情のはざままで

平成四年七月三十日 初版発行

定価 二五〇〇円(税込)

著者 福本邦雄

発行所 フジ出版社

東京都中央区銀座八十一一一大和ビル郵便番号一〇四

電話 〇三―三五七三―二五六一―二

振替 東京〇―一五五六三

制作 創芸社

印刷所 暁印刷

東京都文京区関口二丁目四十四番四号

製本所 小高製本工業

東京都新宿区北町四十一番地

*落丁・乱丁本のお取り替えは、誠にお手数ですが直接フジ出版社までお送り下さい。――往復送料とも小社で負担いたします。

眼を開いてみる夢

もくじ

歌による自己表現の試み（序にかえて）

第一章 仏の唇は燃ゆべきものを——会津八一

- 1 老婆の一喝 12
- 2 いにしえへの回帰 18
- 3 女性美への憧憬 23
- 4 哀しい愛のかたち 29
- 5 舌頭に回転す 35
- 6 茂吉との相似点と相違点 39
- 7 独自の短歌世界を構築 46

第二章 真命の極みに堪えて——吉野秀雄

- 1 忘れ得ぬ挽歌 54
- 2 いのちの極みに 58
- 3 「遠田のかはず」と「山鳩」 64
- 4 生死の境に身をおいて 71
- 5 筆一本の闘い 78
- 6 生活者のリアリティ 85
- 7 男の美学 92

第三章 骨壺の底にゆられて——山崎方代

- 1 屈折した鳥取への想い 100
- 2 方代短歌中の絶唱 103

3 山麓の村右左口	108	4 無頼派の系譜	115
5 野の仏のような歌人	119	6 狎れ親しむを許さず	123
7 「山頭火の再来」か	127		

第四章 我にことばあり何か嘆かむ——土屋文明

1 人生そのもののような短歌	136	2 短歌の概念を変える	141
3 勤労者の叫びの交換	146	4 文明の価値基準に沿った秀歌	150
5 茂吉の魔力から逃れて	154	6 家康的な現実主義者	160
7 リアリズムを血肉化する	164	8 非情にもみえる近代性	170

第五章 つねに危うしこころざすとは——斎藤史

1 額の真中に弾丸をうけて(一)	176	2 額の真中に弾丸をうけて(二)	180
3 額の真中に弾丸をうけて(三)	187	4 鞭上げて追われゆく(一)	192
5 鞭上げて追われゆく(二)	196	6 鞭上げて追われゆく(三)	202
7 母が語るは鬼語ならむ(一)	208	8 母が語るは鬼語ならむ(二)	213
9 母が語るは鬼語ならむ(三)	218	10 ひた紅の生ならずやも(一)	224
11 ひた紅の生ならずやも(二)	228	12 ひた紅の生ならずやも(三)	233

第六章 声にひびくは遠世の人ごえ―釈迢空

- 1 現代の呪術師 242 2 神々の喪失 248
3 女歌を殺したものと 256 4 五七五詩型変革の試み 260
5 愛情における侵略主義 266 6 折口学に投影しているもの 273
7 優れた直感と連想力 278 8 実践のための学問を求めて 282

装画 福井良之助「冬日」

歌による自己表現の試み（序にかえて）

この著書は、六編の歌人論を収録している。

それは会津八一、吉野秀雄、山崎方代、土屋文明、斎藤史、釈迢空ら、流派、歌風こそ異にしているものの、いずれもが現代歌壇における著名な歌人たちで、つよく著者の心にふれた人たちにほかならない。

これらの諸編は、亡父和夫の郷里である山陰・鳥取の日刊紙「日本海新聞」紙上に、平成三年一月から同四年五月にわたって、断続的に連載されたものである。

日常の仕事の合間をぬっての執筆であり、馬齢を重ねたことによるエネルギーの衰えも加わってか、著書として上梓するまでの時間が、非常に延びてしまったことは残念であった。

一九七九年、病氣回復後に、美術随想『危所に遊ぶ』を発刊して以来、このたびの著書は九番目にあたる。過ぎ去った年月の流れは早く、著者の歩みはあまりにも遅々としてい

るという気がしている。

各編ごとに付した表題からもおわかり願えるように、とりあげた個々の歌人たちについて、それぞれの人生に立ち向かう姿勢、考え方、成長の過程などを、浮彫りにしようと思図している。

本書に登場してくる歌人たちは、その生き方こそ異にするものの、短歌という表現形式によって自らを演出し、その存在理由を証し、自己の貫徹を目標そうとしている点においては共通している。

女性美への密かな思慕と憧れを、もの言わぬ奈良の石仏に仮託して、抒情的に謳い上げている美の巡礼者・会津八一。

苛酷な闘病生活という、きわめて限定された狭い生活空間の中で、つねに死と隣り合せながら、のっぴきならない身のまわりの日常を、客観的に、しかもリアルに表現しつづけた吉野秀雄。

あけっぴろげで、剽けた自己を巧みに演出しながら、他人の認知と好意をかちとり、それに縋って己の小さな自由を守り通そうとした放浪の歌人・山崎方代。

戦後の窮乏時に、自ら農耕に携わり、栽培したものをすべてを食糧として咀嚼、消化し、血肉化することによって、遅しく混乱期をきりぬけ、「生活即短歌」という短歌革新を実

踐した土屋文明。

初期のモダンで、ローマン的な志向が、二・二六事件、山国信州への疎開、肉親の看病などという厳しい現実生活の試練を経ることによって、その幻想性、象徴性に、深みと真実味を加えた斎藤史。

己の出自への懐疑と同性愛者という後ろめたさから、その悲劇的な宿命に抗^{あらが}い、神の言葉を告げる呪術師であると、自らを自覚することによって、その存在理由を証明しようとした釈道空。

以上のような視点から、各人の短歌による自己演出と自己貫徹の軌跡を描き出そうと試みたのである。

著者は前著『燃焼』において、吉井勇、川田順、北原白秋、与謝野鉄幹、晶子、斎藤茂吉、これに道浦母都子、李正子の新鋭歌人を加え、彼らが如何なる対象に向かつて、どのように情熱を燃焼させたかについて詳しく論じている。

従って、本書はもともとその後編とされるべきもので、両者が相補うことにより、著者の意図するところも、よりはっきり浮かび上がってくるはずである。

このように様々な有名歌人の生き方や、個性の違いについて書き綴っているうちに、ひとつの或る漠然とした考え方が、次第にはっきりと形を整えてきたように思われた。

それは平成三年の八月、ハワイの自宅で夏の休暇中に、土屋文明論を執筆しながらゆきあたたつた、次のような考え方にほかならない。

青春時代には、とかく刺激的、感動的、耽美的なものを追い求めがちで、抒情的傾向に走りやすい。

従って短歌に親しもうとする人たちも、最初のうちは、モダニズム、ロマンティズム、シンボリズム等々、ヨーロッパ的で目新しい表現形式に競つてとびついてゆき、それぞれの色に染めあげられてしまう。写真などというものは、古くさく、田舎的であるとして、いっこうに顧みようとしない。

ところが次第に年輪を重ね、感受性の鈍化と共に、考え方も常識的になってくると、観念の遊戯、抒情的な傾向はいつしか色褪せて、背景に退いていく。抒情が主役となり得るのは、人々がそれに陶醉し、完全燃焼できる青春のほんの一瞬にすぎないように思われてくる。

それと入れ替って眼前に現れてくるのが、平凡で、単調な日常生活の繰り返しである。長い目でみれば、これが人生の常態で、その「主役」ともなるものである。

こうした現実以身をおいているにもかかわらず、いつまでも青春時代の幻影にとらわれて、いたずらに変化や刺激のみを追い求めようとすると、年寄りの冷や水となって、身を

誤りかねない。

しかしその一方で、無味乾燥と思われる現実のうちからも、何らかの真実、滋味を見出していこうと努めていかないと、退屈の錆に覆われて、いつしか朽ち果ててしまうことも事実だろう。

こうした眼で見直してみると、破調で、きわめて馴染みにくかった土屋文明の即物的な短歌からも、いままでは違った面白味を汲みとることが出来るような気がしてきた。

リアリティ、即ち写真が、退屈な人生の主役で、抒情はその素材を損なわれないように注意しつつ、それに味付けをし、変化を与えるための調理法、もしくはスパイスなのではないだろうか。そう気がかされたことが、この著作を通じて得た感慨であった。

しかし、文明率いるアララギ派の運動が、写真、客観化の徹底を急ぐあまり、主観、即ち抒情的傾向を、偏狭に排除しようといきりたつと、短歌そのものが味もそっけもない、砂を噛むようなものになっていくという弊害を生じかねない。

こうした想いにつき動かされて著者は、土屋文明論を執筆した以降、さらにアララギの写生歌に対して、幻想的、象徴的な歌風を勇敢に守り通している斎藤史、アララギに閉塞させられた女歌の復権を執拗に説いている釈道空にまで、書き進んできた。

以上のような思索の過程を経て、人生の主役は写真であり、抒情は脇役であるけれど

も、短歌表現においては、決して写実が侵略主義的に抒情を排除し、追放してはならないこと、両者がうまく噛み合うことの重要さを改めて痛感させられたのである。

従って本書の表題も、こうした意図に沿って決めている。

最後に、本書は様々な歌人たちの生き方や、個性について描きながらも、そこに亡父和夫と著者との精神的なつながりの投影を、覗きみていたようにも思われる。

つまり、彼らを語ることは同時に父を語り、ひいては私自身の心のあり方を述べることもあったのだ。

それ故に、新聞連載時には、各歌人ごとに「わが心の……」というサブタイトルを付してきたわけである。著者との心のつながりの標しるしとして――。

平成四年花冷えのまだ去らぬ昼下りに

第一章

仏の唇は燃ゆべきものを

会津八一

1 老婆の一喝

その日、炎暑に乾ききっていた古都奈良の町は、久しぶりの恵みの雨に濡れて、生き返ったような表情をみせていた。明治四十一年の八月六日のことである。

たった一人、大阪を発って奈良駅に降りたった青年・会津八一は、時ならぬ真夏の雨をむしろ肌に快く感じながらも、急ぎ足で町中を抜け、駅からあまり遠からぬ、東大寺転害門脇の対山楼にたどりついて旅装を解いた。それは旅籠屋と呼ぶにふさわしい、庶民向きの旅宿であった。

宿へ着くなり、二階の廊下に雑貨類を並べて商っていた婦人から、ありふれた奈良の名勝案内を買い求めた。

小憩の後、宿の浴衣に着替えた八一は、案内書を片手に、宿の番傘を借りうけて、雨に煙る町中へ見物に出かけていった。

猿沢の池のまわりを散策し、春日野公園をそぞろ歩き、老杉にとり囲まれた朱塗りの春

日大社に詣でたのち、起伏なだらかな若草山へと登った。

全山雨を吸って、芝草も生き返ったように嬉々として見える頂きにたたずむと、眼下には東大寺、興福寺の大伽藍をはじめ、まだ名も知りそめない寺院や市街の屋並みが、雨の中にしっとりと濡れ滲んで遠望できた。八一がこれまで詠み馴じんできた古代万葉の世界さながらに――。

こうして対山楼に二泊した八一は、近くの東大寺、興福寺、新薬師寺、法華寺などを巡遊したあと、奈良の町から郡山まで汽車に乗り、そこから乗合馬車を乗り継いで、斑鳩の里にある法隆寺へ赴いている。

あいにく、到着したこの日は、拝観時間をすでに過ぎていたため、目的がかなえられず、法隆寺村にある「かせ屋」という宿屋に泊まることを余儀なくされた。

この夜、八一はいかなる理由からか、かなり深酒したらしく、その翌日、宿の老女将からその不心得を窘められたという、次のようなエピソードが残されている。

法隆寺、法輪寺、法起寺などを経巡って宿へ戻ってきた八一の部屋へ、不意に老女将が顔をのぞかせた。いきなり、

「ひどくお酒を飲まっしゃるお人やね。どんなお人かとお顔を見に参じました」という口上があって、八一を前に、老女将が座敷に座りこんだ。

八一が、聖徳太子の事蹟を調べるために当地へ来たのだと説明すると、老女将はにわか
に居ずまいを正して、説教を始めた。

「太子さんを勉強しようとしやはるお方がこないお酒飲まっしゃって、太子さんのことなど
わかること絶対にあらしまへん。そんな不心得なお方は、よその宿屋へ移ってもらいまひ
よか」

という激しい見幕であった。

彼女の怒りにおそれをなした八一が、神妙に詫びを入れると、

「そんなら今夜はお酒を飲んであきまへんえ。その代りに、真桑瓜を冷やしてあげるよ
ってからに……」

と、よくやく機嫌が直ったといわれる。

八一はこうした顛末を述べ、「こんなうまい瓜をくったことはこれなく候」と、老婆の
肖像を描いた墨絵を付して、この旅先から、親友であり、義弟にもあたる桜井天壇（当
時、学習院教授）にあてて、書き送っているほどである。

奈良の仏教美術と風物に、初めて出合ったはずの八一が、その仏像や建築に触れた感想
をこの時は何も記していない。これに反して、この老婆の一喝により、寺社を巡礼し、先
師の事蹟を偲ぶための心得を悟らされた驚きのみを、親友に伝えている点が注目される。